

感染症と文明——共生への道

山本太郎著(岩波新書・756円)

「共生」が流行りだが、どうやら生物どうしの共生は、私たちが思いがちな甘っちょろいものではない。生存をかけたせめぎ合いの末、なんとか妥協できる状態というのが、現実らしい。

「異なる生物種どうしが一緒に生活している状態」が共生だが、そもそも最初は、片方の一方的な依存から始まる。「寄生」といったほうが分かり易い。せめぎ合いの結果両方に利益が生じればめでたしとなるが、実は共生には、片方にしか利益がないままの場合も多いという。

そればかりではない。当初は一方が害を受けることも、当然あるわけだ。私たちが悩まされ、時に大流行におびえる幾多の感染症は、まさに寄生体が宿主たる私たちに有害な状況を引き起こしているもの。そうした感染症の病原となる寄生体は、実にさまざまだ。

腸などに住む各種の寄生虫(鉤虫、回虫、住血吸虫など)。単細胞だが多彩な病原(マラリア、アフリカ眠り病など)。小型の単細胞生物である細菌(結核、ペスト、ハンセン病など)。遺伝子の塊であるウイルス(天然痘、麻疹、インフルエンザ、エイズ、SARSなど)。新しい連中も、まだまだ現れてくる。彼らは繁栄を極める新種の大型動物・人間を舞台に、「新しい生態学的地位」を獲得した(または獲得しようとして奮闘中)の連中である。そう

微生物と人の平和的共存とは

言われてみると、彼ら寄生体も、病原体にも、何やら親しみも湧いてくるような。感染症対策で世界を駆けまわる国際保健学者である著者は、さまざまな時代と地域における感染症の大流行について語る。中世ヨーロッパのペスト大流行や、多様な感染症を持つ旧世界が接触した時に起きた南北アメリカの諸民族の崩壊のように、世界史を変えるほどの感染もあった。そうした感染症の流行パターンは、人間という生態学的ニッチに入りこんだ微生物たちの、秘術を尽くした戦いの跡でもあることが、ページとともに明らかになってくる。

まず農耕による定住化と人口集中が、人から人への感染機会を飛躍的に拡大し、腸管寄生虫などの繁栄をもたらした。重要なのは、野生動物の家畜化である。天然痘は、牛が持っていたウイルスが人間に感染して生まれた。麻疹は犬から。インフルエンザは水禽、百日咳は豚。家畜化できる動物を人間はみな家畜化し、そして感染症の病原体を引き継いだ。寄生体にとって、増え続け集中し続ける人間は願ってもない新しい世界。文明はまさに、感染症の温床になった。

戦争や通商や移民で世界を結びグローバル化へと突き進んだ人間は、感染症をさらに広め育てた。その一方で研究を進めて、病原体を特定し抗生剤やワクチ

ンを発明、検疫などの対抗法を考案した。二〇世紀にはペストの流行を食い止め、天然痘ウイルスの撲滅にも成功した。だが著者は、感染症の撲滅が良いことかどうかは、わからないと言っている。人間という広大な世界は微生物には魅力だから、感染源のウイルスを根絶すると別のウイルスが空いたニッチに入ってきて、新たな感染症を引き起こすかもしれない。いっぽうで、例えば感染源が百年といった長

い潜伏期を持つようになれば人間にとって危険はなくなるばかりか、他のウイルスに対する防波堤にもなると言うのである。感染症というせめぎ合いから、平和的共生へ。もしも人類文明が環境を安定したものに出来るなら、それも将来、夢ではないかもしれない。この本で感染症を深く知るだけでなく、厄介ものと見えていた病原体に新しい目を注ぐべききっかけになるかも。